

資料

高齢者とのふれあいに幼稚園・保育所が抱く 幼児の将来への期待

— 全国の幼稚園・保育所へのアンケート調査結果より —

關 戸 啓 子^{*1}

はじめに

核家族・小家族化がすすみ、地域とのつながりも希薄になった今日においては、子どもたちが多様な人間関係を経験する場が少なくなっている。このことが今日の子どもたちが巻き起こす暴力行為やいじめなどの問題行動とも関連がある¹⁾といわれている。『平成12年度我が国の文教施策』においても「子どもたちに対人関係のルールを教え、自己規律や共同の精神をはぐくみ、伝統文化を伝えるといった役割を担ってきた家庭や地域社会の『教育力』が著しく低下し、このことが、いじめや不登校、青少年の非行問題の深刻化などの様々な問題が生じる背景となっている²⁾」と述べられている。子どもの社会的交渉の範囲が広がっていくにつれて、子どもの社会的経験は拡大し、社会的経験の蓄積を通して子どもは当該社会の人間へと発達していく³⁾のである。よって、子どもが社会に適応し成長発達するためには、豊かで多様な人間関係から、多くの経験をしていくことが必要となる。しかし、子どもたちの現状について、坂口⁴⁾は「子ども達は人間関係の接し方やかわり方を自然発生的に習得する場が減少し、閉じられた親子関係や少数の人間関係に限定されたきわめて広がりがない空間で人間関係の形成過程を過ごしているのが今日の状況です。異年齢とのかかわりは言うに及ばず同年齢でさえも、相互交渉の少ない中で生活している子ども達にとって、人間関係の様々な実相を体験する場も限定されているばかりか、物質的豊かさとは反比例して人的環境が目も覆うほどの貧困さを呈するようになってきた」と指摘している。換言するならば、核家族化が進み、急速に少子高齢化社会を迎えようとしている現代においては、さまざまな人とふれあいながら人間関係を体得していくというごく自然な成長発達の基盤が崩れているということなのである。特に幼児期における

体験は、その後の人生に与える影響が大きい⁵⁾と考えられている。こうした社会での幼児の体験不足はその後の発達に重要な意味を持つだけに、人的環境をはじめ諸環境をどのように整備していくかは大人に課せられた大きな課題である。

このような現状をも鑑み、昨今、幼児教育の現場では老人ホームへの訪問や幼児の祖父母との交流会など、幼児と高齢者のふれあいを実施しているところが多くなってきている。さらに、最近ではイベント的な交流ではなく、常に幼児と高齢者が同じ施設内にいるという、幼稚園や保育所と高齢者用施設が一体となった複合型施設もみられ始めた。1階が保育所で2階が老人ホームといったようにひとつ屋根の下で一緒に生活する施設や、デイサービスセンターと保育所が隣同士の合築施設などである⁶⁾。地域にいる高齢者や祖父母との交流、複合型施設内での高齢者との交流など、さまざまな方法で高齢者とのふれあいをすすめていこうとする試みがなされている。しかし、高齢者とふれあった体験が、幼児の成長に伴って将来どのような効果となって現れるのかは明確にされていない。幼児の将来にどのような影響を与えるのかは、今後継続的に観察する必要がある。現時点では効果を予測するしかない。そこで、基盤的な研究として、本研究に先立ち保育所にデイサービスセンターが併設されている複合型施設において、日常的に行われている幼児と高齢者のふれあい場面を参加観察して幼児の体験を明らかにすることを試みた。その結果、幼児は高齢者とふれあうことによって、実の祖父母とふれあう場合に近い体験をしていることがわかった。高齢者は実の祖父母が果たす役割に近い機能を発揮しており、継続的にふれあうことによって模擬家族のような関係になることが観察された⁷⁾。幼児期における高齢者とのふれあいの効果を今後継続的に検討する参考資料として、幼児教育や保育の専門家が、幼児と高齢者のふれあ

*1 徳島大学 医学部 保健学科

(連絡先) 關戸啓子 〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15 徳島大学

いが幼児の将来にどのような効果をもたらすと期待しているのか調査したので報告する。

幼稚園・保育所で高齢者との ふれあいが増加している背景

先に、幼稚園・保育所において高齢者とのふれあいが活発化している背景について述べる。そこには、時代の流れに伴って「保育内容」が変化の様子がみてとれる。「保育内容」とは、保育の目的や目標を達成するために、幼稚園や保育所において幼児に経験させたい内容のすべてをさしてあり、わが国においては、幼稚園教育要領や保育所保育指針に示されている⁸⁾。幼稚園教育要領は1964年(昭和39年)以来長らく改正が行われていなかったが、1990年(平成2年)に幼児を取り巻く社会の変化に対応するため、約25年ぶりに改正された。その改正理由のひとつとして、幼児の人間関係の希薄化、自然とふれあう機会の減少、幼児らしい遊びの衰退というような幼児期にふさわしい生活が妨げられていることがあげられている。このため、1990年(平成2年)施行の幼稚園教育要領ではこれまでになかった「人間関係」という領域が新たに設定され、幼稚園という集団生活のみならず、地域での一般社会生活における、望ましい習慣や態度の育成がねらいとして設定されている⁸⁾。その後、さらに改正され、現在のものは2000年(平成12年)から施行されている幼稚園教育要領であるが、「人間関係」という領域が重視されていることに変わりはない。これに対応するようなかたちで、保育所保育指針も、最初に出された1965年(昭和40年)以来改訂されてなかったが、1990年(平成2年)に大幅に改訂された。さらに改訂が行われ、現在のものは2000年(平成12年)から施行されている保育所保育指針である。1990年(平成2年)の改訂の視点のなかに、多様な人間関係体験や異年齢集団活動体験の不足、直接体験、戸外遊びの不足等の問題が指摘されており、幼稚園教育要領と同様に「人間関係」という領域が新たに設定され⁸⁾、現在まで引き継がれている。このように、保育の現場でも幼児の生活の変化に伴って、積極的に「人間関係」を養う保育へと取り組むことが必要となったのである。

幼児を取り巻く、人間関係の展望として坂口⁹⁾は、高齢化社会における子どもと高齢者のかかわりと国際社会の到来による異文化間の交流をあげている。この子どもと高齢者のかかわりについて坂口¹⁰⁾は、「乳幼児と高齢者のふれあいの場が喪失した核家族に代わって幼稚園や保育所が、乳幼児と高齢者との出会いの場を意図的に形成する役割を担う。」と述

べている。このように、時代の要請をうけて、幼稚園や保育所が高齢者とのふれあいを提供することが求められているのである。

用語の定義

「ふれあい」という言葉は、本研究においては、次のように定義して用いる。幼児と高齢者が単に同じ場所にいるとか、物理的に顔を合わせている状況をいうのではなく、幼児と高齢者が一緒に笑ったり気持ち共有できるような交流を「ふれあい」という。

すなわち、バーバル・ノンバーバルに、相互に交流することによって、そこに対人感情を伴うような人間関係が形成される状況を「ふれあい」という。

調査方法

1. 調査方法と内容

全国の保育所・幼稚園へアンケート用紙を郵送し、返送を依頼する方式で質問紙調査を行った。研究の趣旨を説明する文章を付け、返送は任意とした。

質問項目は、著者の複合型施設による参加観察の体験と、その施設の保育士からの助言をもとに作成した。高齢者とふれあうことが、幼児の将来にどのような効果をもたらすと期待できるのかを推察して、15項目の質問を考案した。それを、教育学、保育学、臨床教育学を各専門とする3人の研究者に見せ指導を受けた。その結果、3人の研究者が共通して質問として妥当であろうと選んだ10項目を、本調査の質問として用いた。回答は「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」の3段階の選択肢のなかから、最も近い考えのところにをつけてもらう方法をとった。また、幼児が高齢者とふれあうことによる将来への期待に関する自由記載の欄も設けた。調査対象の施設が幼児と高齢者のふれあいを実施しているか否かに関わらず、幼児教育や保育の実践家として、幼児の将来にどのような効果が期待できているのかについて回答を求めた。幼児と高齢者のふれあいの形態や頻度については限定を設けず、「幼児が高齢者とふれあうことによって」という表現で質問を行った。

2. 調査対象

幼稚園は、『2000年版全国学校総覧(原書房発行)』に掲載されている14,229の幼稚園から、無作為に700の幼稚園を選び郵送した。ただし、都道府県によって幼稚園数に差があるため、都道府県ごとに幼稚園数を調べ、全国数に占める割合を算出した。その比に従って、各都道府県より幼稚園を無作為に選んだ。保育所は2000年8月現在で「日本保育協会」に加盟している、4,373の保育所から、幼稚園の場合と同様の方法で、700の保育所を選び郵送した。

表1 幼稚園・保育所へのアンケートの回答者

	園長(施設長)	副園長(副施設長)	主任	教諭	保育士	その他	無回答	合計
幼稚園	186 (50.0%)	14 (3.8%)	109 (29.3%)	36 (9.7%)	2 (0.5%)	10 (2.7%)	15 (4.0%)	372 (100.0%)
保育所	193 (54.1%)	9 (2.5%)	91 (25.5%)	0 (0.0%)	32 (9.0%)	10 (2.8%)	22 (6.2%)	357 (100.0%)

回答者については指定を行わず、質問項目として回答者の職位に関する欄を設けた。よって、回答は施設の総意ではなくて回答者の意見である。

3. 調査時期

発送は、2000年8月1日～11日の間に行った。返送期限は、2000年9月中旬頃までとした。2000年10月31日までに到着したアンケート用紙を有効として取り扱った。

結 果

1. 回答した幼稚園・保育所の背景

アンケートの回収数は幼稚園406(回収率58.0%)、保育所388(回収率55.4%)であった。また、有効回答数は、幼稚園372(有効回答率91.6%)、保育所357(有効回答率92.0%)であった。

アンケートに回答した人は、表1に示すとおりで、幼稚園・保育所ともに約半数は園長や施設長が回答していた。

また、アンケートに回答した幼稚園・保育所の規模は表2に示すとおりである。

高齢者の利用施設との複合型施設は、幼稚園で4、保育所で20施設あった。そのなかで、複合型施設を生かして幼児と高齢者のふれあいを実践しているのは、幼稚園で2、保育所で3施設であった。

2. 幼児が高齢者とふれあうことによる

将来への期待

アンケート結果を表3に示した。これは、アンケートに記載した質問項目の順に、単純集計した結果である。今回は回答した幼稚園と保育所数に比べて、複合型施設の占める割合が少なく、かつ日常的なふれあいを行っていない複合型施設も含まれるため、回答した施設が複合型施設であるか否かは考慮せず単純に集計した。また、回答結果に、幼稚園と保育所の間有意差はみられなかった。そこで、幼稚園と保育所の平均をとり「そう思う」と回答のあった割合が多い順に質問を並べ替えてグラフにあらわしたものが図1である。

高齢者とふれあうことによって、将来に期待される効果として、「そう思う」と最も多くの幼稚園・保育所が回答した項目は、「高齢者を大切にようになる」

表2 通園している子どもの数

子ども数	幼稚園	保育所
0-50	6 (1.6%)	30 (8.4%)
51-100	96 (25.8%)	164 (45.9%)
101-150	134 (36.0%)	117 (32.8%)
151-200	80 (21.5%)	28 (7.8%)
201-250	25 (6.7%)	13 (3.6%)
251-300	23 (6.2%)	2 (0.6%)
301以上	8 (2.2%)	1 (0.3%)
無回答	0 (0.0%)	2 (0.6%)
合計	372 (100%)	357 (100%)

(87.2%)であった。次に多かったのは、「人のことを思いやることができるようになる」(78.1%)で、それに次いで多かったのは「家族を大切にようになる」(71.5%)であった。以上の3項目については、7割以上の幼稚園・保育所が「そう思う」と回答していた。これに次いで6割以上の幼稚園・保育所が「そう思う」と回答した項目は「性格がやさしくなる」(67.9%)、「人を援助することができるようになる」(63.2%)、「人の命を大切に考えられるようになる」(61.3%)であった。

逆に、「そう思う」よりも「どちらともいえない」と回答した幼稚園・保育所の方が多かった項目は、「自分に自信がもてるようになる」「協調性が豊かになる」であった。

また、「そう思う」と「どちらともいえない」と回答した幼稚園・保育所がほぼ同数に近かった項目は「性格がおだやかになる」「感受性が豊かになる」であった。

3. 幼児が高齢者とふれあうことによる

将来への期待に関する自由意見

高齢者とふれあうことによって将来期待されることに

表3 幼児が高齢者とふれあうことによる将来への期待

質 問	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	無回答
性格がやさしくなる	267 (71.8%)	92 (24.7%)	2 (0.5%)	11 (3.0%)
	228 (63.9%)	110 (30.8%)	6 (1.7%)	13 (3.6%)
高齢者を大切にできるようになる	333 (89.5%)	39 (10.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	303 (84.9%)	53 (14.8%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)
人を援助することができるようになる	242 (65.1%)	110 (29.6%)	3 (0.8%)	17 (4.6%)
	219 (61.3%)	120 (33.6%)	5 (1.4%)	13 (3.6%)
人のことを思いやることができるようになる	307 (82.5%)	60 (16.1%)	3 (0.8%)	2 (0.5%)
	262 (73.4%)	86 (24.1%)	0 (0.0%)	9 (2.5%)
性格がおだやかになる	195 (52.4%)	157 (42.2%)	7 (1.9%)	13 (3.5%)
	163 (45.7%)	169 (47.3%)	5 (1.4%)	20 (5.6%)
感受性が豊かになる	188 (50.5%)	154 (41.4%)	9 (2.4%)	21 (5.6%)
	153 (42.9%)	165 (46.2%)	14 (3.9%)	25 (7.0%)
家族を大切にできるようになる	279 (75.0%)	78 (21.0%)	4 (1.1%)	11 (3.0%)
	242 (67.8%)	97 (27.2%)	4 (1.1%)	14 (3.9%)
協調性が豊かになる	147 (39.5%)	182 (48.9%)	12 (3.2%)	31 (8.3%)
	127 (35.6%)	196 (54.9%)	8 (2.2%)	26 (7.3%)
人の命を大切に考えられるようになる	233 (62.6%)	109 (29.3%)	6 (1.6%)	21 (5.6%)
	214 (59.9%)	127 (35.6%)	2 (0.6%)	14 (3.9%)
自分に自信がもてるようになる	124 (33.3%)	195 (52.4%)	24 (6.5%)	29 (7.8%)
	97 (27.2%)	205 (57.4%)	21 (5.9%)	34 (9.5%)

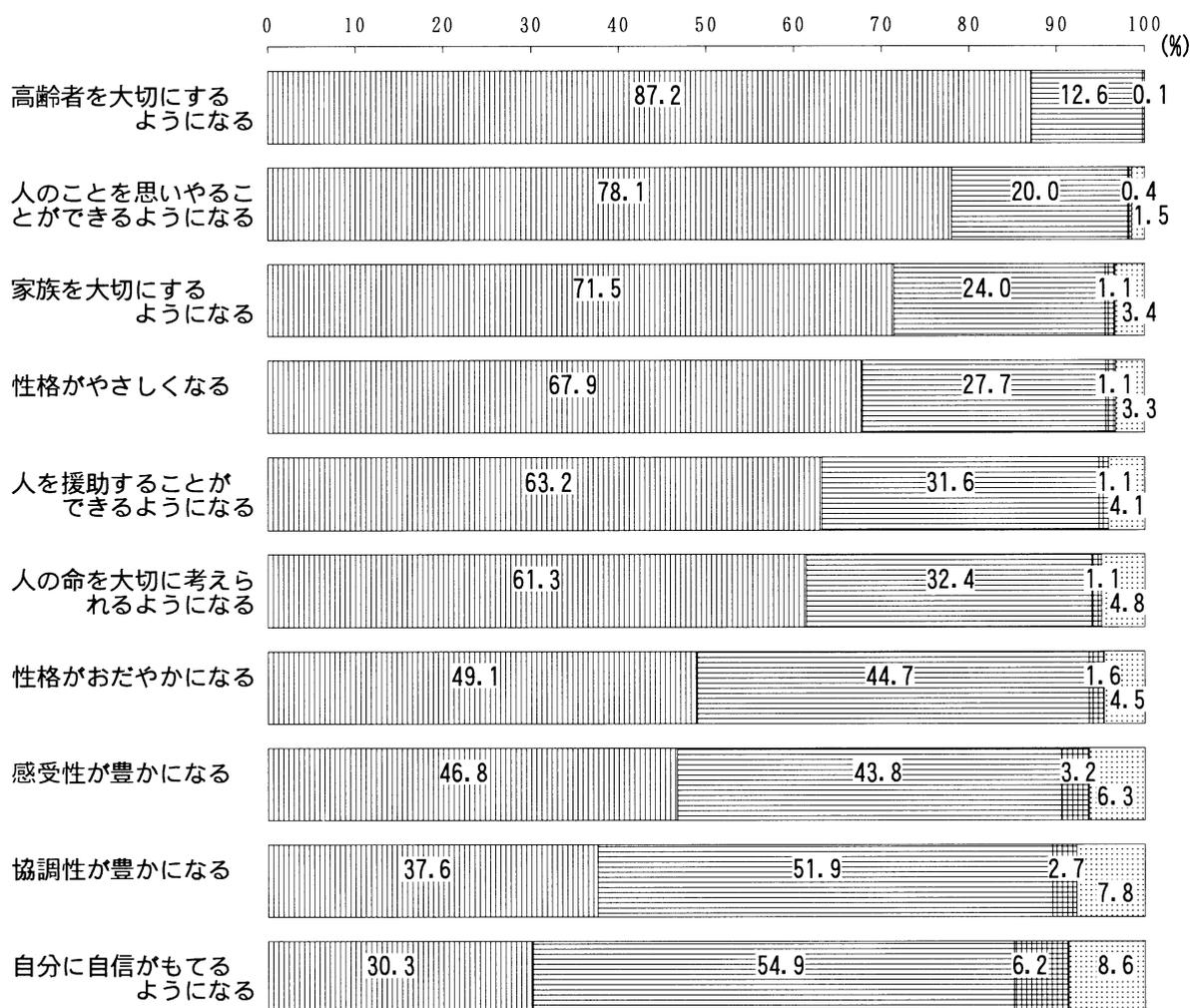
注) 上段: 幼稚園 (n=372), 下段: 保育所 (n=357)

関する自由記載の内容をまとめたものが表4である。

自由記載では、「高齢者とのふれあい体験のみで、子どもの成長に影響があるとは考えられない」「家庭での生活環境が大きく、高齢者とのふれあいだけでもは言えない」「高齢者とのふれあいは大切であるが、直接的な効果としては計れないと思う」「高齢者とのふれあいだけを取り出して、子どもの将来への期待と言われても回答できない」という、高齢者とのふれあいだけが影響を与えるわけではないという意見が多かった。また、「同じ体験をしても、子どもの持つ感受性によって、受け取り方はさまざまである」という子どもの個別性に触れた意見もみられた。

考 察

アンケートの結果をみると、高齢者とふれあうことによる幼児の将来への効果として「高齢者を大切にできるようになる」「人のことを思いやることができるようになる」「家族を大切にすることができるようになる」「性格がやさしくなる」「人を援助することができるようになる」「人の命を大切に考えられるようになる」ことが期待されていた。太田¹¹⁾は三世同居に関して「子どもにとって、祖父母の姿を日常の場面で見つて育つことがなく、しかも、祖父母の死に立ち会うこともなければ、死というもの



注) 縦線: 「そう思う」, 横線: どちらともいえない
 斜線: 「そう思わない」, 点線: 無回答
 n = 729

図1 幼児が高齢者とふれあうことによる将来への期待

表4 幼児が高齢者とふれあうことによる将来への期待(自由記載)

記載内容	回答数
高齢者とのふれあい体験のみで、子どもの成長に影響があるとは考えられない。	13
家庭での生活環境が大きく、高齢者とのふれあいだけでもの言えない。	7
高齢者とのふれあいは大切であるが、直接的な効果としては計れないと思う。	5
同じ体験をしても、子どもの持つ感受性によって、受け取り方はさまざまである。	2
高齢者とのふれあいだけを取り出して、子どもの将来への期待と言われても回答できない。	2

(複数回答あり)

の厳肅さや大変さを感じることもなく育っているのが実情です。老いや死へのいたわりや思いやりが育たないのももっともです。三世代同居は、高齢者を大切にすることのみに留まらず、自分を始め、すべての人々を大切にすることを育むための学びの場でもあります。」と述べている。すなわち、祖父母と同居することによって、子どもは高齢者をはじめ人を大切に、いたわりや思いやりをもって接することを学ぶというのである。これは、幼児が高齢者とふれあうことによって幼児の将来に期待されることとして、多くの幼稚園・保育所が回答した結果とよく一致している。幼稚園・保育所は、高齢者とのふれあいに、幼児たちが実の祖父母と接する場合に近い効果を期待していることが示唆された。著者⁷⁾が行った幼児と高齢者のふれあい場面の参加観察によっても、高齢者は祖父母に近い役割を果たすことが観察されており、幼稚園や保育所が期待している内容は、今後の調査の参考になる知見といえよう。

一方、「協調性が豊かになる」「自分に自信がもてるようになる」という項目については、「どちらともいえない」という回答が多かった。つまり、この二つの項目は高齢者とのふれあいよりも、同年代の幼児同士の集団のなかで育つことの方が多いと考えられたのではないかと推察される。幼児は幼児同士の会話や遊びやけんかのなかから、協調や他者理解・共感などを学習する¹²⁾といわれている。また、仲間からの評価によって新しく自己を発見し自信を形成していく¹³⁾ともいわれている。このように、同年代の幼児同士の集団のなかで協調性を身につけたり、他者との比較によって自信をつけたりするのではないかと考えているため、今回の調査では協調性や自信については、「どちらともいえない」という回答が多くなったのではないだろうか。

高齢者とふれあうことによって将来期待されることに関する自由記載からは、高齢者とのふれあいだけを取り上げて幼児に与える影響をみることの難しさ、

幼児の個別性をとらえることの大切さについて提言がなされていた。確かに、幼児は育つ環境全てから影響を受けているのであり、高齢者とのふれあいだけに関してのみ質問されて、回答者が戸惑うのは当然であろうと思われる。また、幼児の個別性も研究上重要な要素である。今回の調査結果を参考に、今後、実際に高齢者とのふれあいを体験した幼児に対する継続的な調査を行う重要性が示されたといえよう。今後の調査においては、幼児と高齢者のふれあいの形態や頻度を詳細に明らかにすること、幼児の個別的な養育環境も考慮に入れることが必要であることが実感された。

ま と め

全国の幼稚園と保育所に、幼児と高齢者がふれあうことによって、将来どのような効果が期待されるかをアンケート調査した。

高齢者とふれあうことによって、将来に期待される効果として、「そう思う」と多くの施設が回答した項目は、「高齢者を大切にできるようになる」(87.2%)、「人のことを思いやることができるようになる」(78.1%)、「家族を大切にできるようになる」(71.5%)であった。幼児が実の祖父母と暮らす場合と近い効果が期待されていることがわかった。

逆に、「そう思う」よりも「どちらとも言えない」と回答した施設の方が多かった項目は、「自分に自信がもてるようになる」「協調性が豊かになる」であった。この2項目については、幼児同士の仲間関係のなかで養われることの方が多いと考えられていると推測された。

幼児と高齢者のふれあいに対する自由記載では、高齢者とのふれあいだけ取り出して効果は判断できない、幼児の個別性もあり幼児によっても違うという意見がみられた。

本研究は、2000年度笹川科学研究助成を受けて行った研究の一部である。

文 献

- 1) 家庭裁判所調査会編：重大少年犯罪の実証的研究。司法協会，東京，28-29，2001。
- 2) 文部省編：第1節 教育改革の基本的考え方。平成12年度我が国の文教施策，大蔵省印刷局，東京，2，2000。
- 3) 住田正樹：子どもの発達社会学。子どもの仲間集団と地域社会，九州大学出版会，福岡，1-4，1985。
- 4) 坂口哲司：1章 人間関係。坂口哲司編，保育・家族・心理臨床・福祉・看護の人間関係—人間の生涯・出会い体験—，初版，ナカニシヤ出版，京都，9，1998。
- 5) 佐藤眞子：人間関係の発達心理学2 乳幼児期の人間関係。初版，培風館，東京，19-24，1996。
- 6) 多田千尋：遊びが育てる世代間交流。初版，黎明書房，名古屋，30-51，2002。
- 7) 關戸啓子：複合型施設における高齢者とのふれあいが幼児にもたらす教育的意義。日本家政学会誌，53(7)，649-657，2002。

- 8) 山本和美：第4章 保育の内容を考える．土山牧羔監修，新版現代保育原理，建帛社，東京，70-104，1997．
 9) 前掲書 4) 16-17
 10) 前掲書 4) 16
 11) 太田敬子：家族場面の人間関係．坂口哲司編，保育・家族・心理臨床・福祉・看護の人間関係 ―人間の生涯・出会い体験―，初版，ナカニシヤ出版，京都，89，1998．
 12) 原野明子：8章 幼児の対人関係の発達 2節 仲間関係の発達．祐宗省三編，子どもの発達を知る心理学，北大路書房，京都，107-108，1995．
 13) 住田正樹：子どもの発達と仲間集団．子どもの仲間集団と地域社会，九州大学出版会，福岡，36-66，1985．

(平成15年6月5日受理)

**Communication between the Elderly and Pre-School Children: Kindergarten and Day Care Nursery Staffs' Expectations of Pre-School Children for the Future
 — From the Analysis of a Questionnaire Survey —**

Keiko SEKIDO

(Accepted Jun. 5, 2003)

Key words : COMMUNICATION, THE ELDERLY, PRE-SCHOOL CHILDREN,
 KINDERGARTEN, DAY CARE NURSERY

Correspondence to : Keiko SEKIDO

Major of Nursing, School of Health Sciences,
 The University of Tokushima
 Tokushima, 770-8509, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.13, No.1, 2003 195-201)